

たけべアメージングストーリー

第二話

建部中学一年生の鮎太は、ある日、友だちの温人から不思議な話を聞かされる。それは、できたばかりの大田トンネルで、近所のおじいさんの愛犬フクちゃん、突然まばゆい光と共に姿を消した出来事。半年後、鮎太は確かめるため、温人と待ち合わせトンネルに行くことにする。しかし、当日やって来たのは温人だけでなく鮎太の妹、さくらもいた。深夜0時を待つ三人。

そして0時過ぎ、猛烈な光が襲う。建部の富沢村を、盗んだ地蔵を大人車にのせ運んでいた富蔵は突然の輝きと物音に腰を抜かし仏像を落として割ってしまう。同じ時、近くの旭川の岸を通りかかった日蓮宗不受不施派の高僧、日船も音を立てて飛ぶ明かりに何事やと落ちた先を追う。そこに三人の子どもが倒れているのを見つけた日船は、薬湯を飲ませ介抱したが、鮎太は目の前の光景に再び気を失う。通りかかった富蔵と共に日船は三人を福渡の江田家に運ぶ。三日後、気がついた鮎太は、自分たちが1600年代の建部にいることを知る。

庄屋、江田家にかくまわれた三人を不安が襲う。思わぬ事態に遭遇した日船だが、これも法華の巡り合わせと信じ、子どもらは無事もとの世に戻すためお唱えをする。次の朝、鮎太たちと同じ年頃の女性たちと、若い僧侶の五人が待ち受けている。三百数十年先の建部に驚き、喜ぶ、信者たち。その夜、温人から不受不施派の受けた苦難について聞かされる。その中には、今朝がたの「福田五人衆」と呼ばれる殉教者がいたことを知る。愕然とする鮎太だが、自分たちのことよりも、先の世の人のことを気にかけていた五人の姿を思い浮かべ、逆にフツフツと勇気が湧きたつのを感ずる。

第1章 「竹内老翁」

「おはようござえます、お呼びでしようか」

「おお、富蔵、朝早くに用立てしてすまぬ。じつはお前も承知であろうが、拙僧は、お上より追われる身。こうしていられるのも長くはあるまい。そこで心配なのは、あの子どもらだ。どこか、安全な地へかくまわねばならぬ。それで、江田殿とも相談したのじゃが、もはやここしかなかるうという場所がある。ついては、お前にそこまで案内を頼みたい。その後は、どこへなりとも行くがよい」

翌日の早朝、僕らは旅立つことになった。上人さまの身に危険が迫っていて、僕らが巻きぞいになるのを恐れたためだ。目立たぬように古着を着て、みの傘をかぶった。シューズはわらじに替え、痛くならないよう鼻緒に布を巻いてもらった。温人はメガネを外し、コンタクトレンズにした。

「それでは、富蔵、よろしく頼むぞ。子どもらも、くじけるでないぞ、のちの世に戻れた折には、ゆつくり旭川の薬湯につかって、拙僧のことを思い起こしてくれ、では、達者でな・・・、はっはっは」

たった数日、表へ出なかつただけなのに外の空気が新鮮でとつても気分がいい。道沿いの家からは、煮たきの煙が昇り、人がひっきりなしに出たり入ったりして、時代劇の撮影現場にでもいるみたいだ。

僕らは見るもの聞くものどれも珍しい中、不審に思われないよう、うつむいてせせと歩いた。川筋が近道だけど用心して、わざわざ人の少ない山あいの道を行くことにした。でも、やがてそんな心配はどうやら必要ないとわかった。この時代の人は、自分のことに精いっぱい、他人のことにかまっていない暇はないようだ。

石段の続く八幡神社の下を過ぎ、細い坂道を上った。これが津山街道だと気づいたのは、「上石引峠」と記された杭が立っていたからだ。この道を昔、参勤交代の行列が通っていたんだと、温人が自慢げに話したのが昨日のことのようだ。そんな温人は、さつきから自分の家があるはず

の場所を探してキョロキョロと落ち着かなくまわりを見回している。でも、目につくのは、山の斜面に何段も作られた猫の額ほどの畑や田んぼで、他に、そこにしゃがみ込むようにして草を取るお百姓の姿があるだけだ。朝方まで不安そうにしていたさくらは、今は晴れ晴れとした顔で、時々、富蔵さんに手を引かれながらついて来ている。

やがて峠に着くと、道の両側に「茶」「甘酒」「めし」と書いた旗をてんでに軒下に掲げた、藁ぶき家が五軒ほど並んで見えた。その一軒から三味線の音がして、前の道ではツギはぎだらけの着物を着た小学一年生くらいの女の子が、下を向いたまま黙って竹箒で庭先を掃いていた。店から少し離れたところで、ねじり鉢巻きに尻はしよりをした駕籠かきの人らしい三人が、道ばたに座り、向かい合って何かを夢中になってやっている。

手を振って開いた先にサイコロが2つ転がった。すぐにそのうちの一人が

「まったくもう、今朝からついてねえで」と言っ立ち上がり、「ちよつくら、参ってくるか」と道の下へ駆けて行った。

温人が小声で「魔力支天さまにお願いするんだよ」とささやいた。

この峠に来る手前に二股の道がある。それを右に登ると、温人の町内で今も守っている「魔利支天様」という神社に出る。そこは賭けごとの神様とかで、昔、この辺の寺や茶屋でバクチをする人が、縁かつぎにお参りしていたんだよと温人から聞かされたことがある。

この時代から二百年あとの幕末には、バクチ打ちの黒船という人が、ここでイカサマをして殺され、そのあと悪霊となつて乱暴を働くようになり、困つた地元の人たちが、お祓いをしてお墓を立てて、やっと静まつたんだとも話してくれた。そのお墓がこの道の上がり口、今度、新しくできた看護学校のそばにまだ残っている。

店の中からでつぶりした女の人が出てきて、「お連れさん、休んでいかれえ」と背筋がぞつとするほど真つ黒い歯を見せながら声をかけてきた。僕らがその気がないのがわかると、「フン、茶を飲む金もねんかなあ」と今度はあきれ顔で罵つた。そのあと道を掃いている女の子に「この役立たずが、いつまでやつとんなら。ただ飯ばあ食いやがつて」と大声でどなりはじめた。

通り過ぎててもそのわめき声は続き、富蔵さんがそれをジーンと背中で受け止めているのが、わかつた。だんだん富蔵さんの足は重くなり、さくらがそんな富蔵さんの袖をひっぱるようになつて、前へ、前へと進んだ。

視界が急に明るくなり、遠くまで黄金色の稲田が広がった。ここから下目だ。うっそうと茂った所がない、小高いところまで田んぼが開かれている。あちこちで作らなくなった田んぼや畑が、荒れ放題になって困り果てる、そんな未来があるなんて想像もつかないだろうな。

僕らの時代はどこからか間違った、・・・そんな話を先日、温人の家の近くで果樹園をする岸太郎さんと言うおじいさんが、お父さんにしてたのを思い出した。

「なあ鮎一郎さん、日本はどっからか間違ったんじゃ、わしゃあ、どうもそう思えてならん。専業の百姓は今やほとんどおらんようになった。皆、勤めに出て、休日の合間に田畑をやる。そのためには機械が必要じゃと言うんで、トラクターや田植え機を買う。それでまた、その金を返すために働かにはあおえん。もう、どっちが始まりじゃったかわからん。ジレンマじゃ。

せえでも、それも歳をとってでけんようになったら、放っておくしかねえ。そういう事が、もうそこら中で起きとる。この先もつとつとこれが進んで、日本の農村からは人がおらんようになり、みんな大阪とか東京とかの都会に住むしかねえようになる」



お父さんはよく温人の家に寄った時などに、細くて小柄なこの、おじいさんと話をしてくる。果樹のことはもちろん、世の中のことにも詳しいおじいさんのことを、お父さんは「太郎博士」と呼び尊敬している

博士は六十歳で会社を辞めて、それから十年かけてアフリカ、中近東、中国、インド、南米と世界中を訪れ、人がどんな土地で何を作り、何を食べ、どういう生活をしているかを見て回った。そして七十歳になり、あらゆる作物づくりに挑戦し始めた。

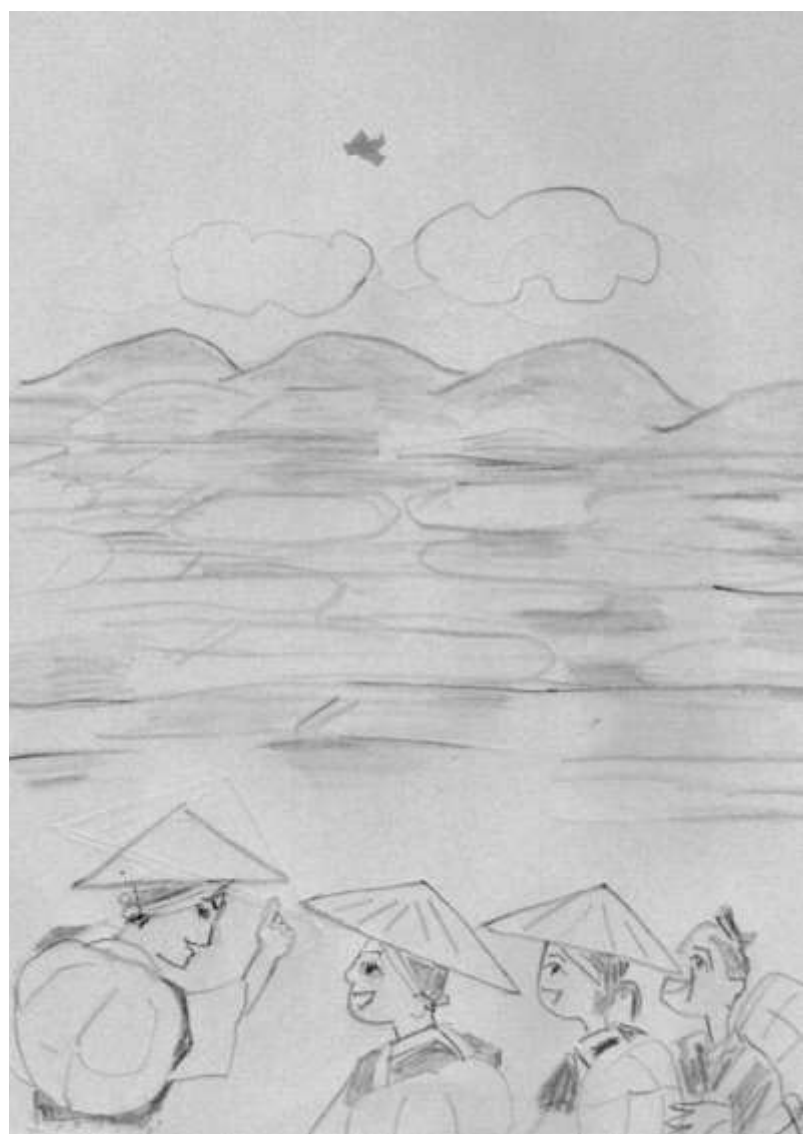
陽当たりのいい傾斜地を一人で開墾し、雨水の集積を兼ねた作業小屋も自力で二棟建てた。そこに梨やリンゴ、蜜柑にぶどう、いちじく、柿、ブルーベリー、メロン、西瓜、茄子にキュウリにカボチャに人参、自然薯・・・と、あらゆるものを植えた。それから今日までの十五年間、毎日、朝出かけては夕方帰る、成育を確認しない日はなかった。

「それがじゃ、鮎一郎さん。あんたは大学の先生じゃけん、よう知つとるじゃろうけど、世界を回ってみんせい。中国にしろ、ロシアにしろどこを見ても、豊かな土地というのは少ねえでえ。作物に必要な肥えた土地、それと水じゃ、水が無いんじゃ。この日本では不自由なくあるものが、世界では、それがなくて作物を育てられんのじゃ。北朝鮮やこう、住んでみられえ。わしは戦後

しばらくおったけん、よう解かった。土がのう、冬は1メートルも凍つとる。それでも耕して、何か作れんもんかとやっておる。皆、生きるのに必死じゃでえ。それが日本では、作ろうと思えば作れるのに、皆がやりたがらんじゃ。日本ほど自然が豊かで、作物に適した所はねえというのに・・・」

青い空に大鷲が舞っている。その下では人や牛がゆっくりと動いていて、どこかの集落から、赤ん坊の泣き声と犬の吠える声が聞こえてくる。山の方からもコーンコーンと木を切る音がして、この自然の隅々まで人の手が入り、暮らしているんだなと思った。

温人も目を輝かせてこの風景に見入っていた。そして「太郎博士がいたら、なんて言うだろうなあ」と独り言をつぶやいた。



しばらく平坦な道を行くと、サワサワと水の音がして吊り橋が掛かっている場所に出た。後ろに控えた山の麓には見覚えのある、りっぱな屋根がのぞいている。志呂神社だ。たぶん前を流れているのは誕生寺川。

二十メートルほどの、一人渡るのがやつの橋から川を覗くと、濃い緑色をした魚の群れが上へ下へと動き回っているのがわかる。誕生寺川は僕の時代でもきれいだと思ってたけど、今のこの水の透明さは、そのまま口に入れて飲みたくなるほどだ。

そのまま、途中途中で休憩しながら川口村まで来た。この間まで日船上人が隠れて住んでいたという小さな小屋で昼食をとった。庄屋さんの奥さんが渡してくれた、竹の皮に包んだ茶色い玄米のおにぎりと梅干。富蔵さんがそれをまじまじと見つめ、涙をぼろぼろと流し始めた。そして、「ああ、おかあと娘にも食べさせてえ」と言った。

さくらが、持っていたおにぎりをそつと差し出した。富蔵さんは何度もお辞儀をして受け取り、がむしやらにほうばっては、また泣いた。

僕はポテトチップスを持っていたことを思い出して、風呂敷に包んだリュックの中から取り出し、さくらに渡した。さくらが嬉しそうに封を開け、食べかけた途端、「おえっ、まずっ！」

温人も手を伸ばし、鼻に近づけ「うっ、へんなにおい」

僕も1枚取って口に入れたけど、とても食べられそうにない。油とか塩の味がこれまでと別物に感じる。

そうか、僕らはここ何日か庄屋さん家で、お粥や雑穀のご飯、青菜のみそ汁といった質素な食事をしてきた。でも、そう受けとつたのは最初だけで、お腹が減るにつれ、それはごちそうに変わっていった。いつのまにか、口が自然の味に慣れてしまい、それまでの物を受けつけなくなってるんだ。

「俺たち、チョー気味の悪いもんを食べてたんだー」温人が言って、三人で可笑しくなつて腹を抱えてのけぞつた。富蔵さんもよくわからないまま、いっしょになつて笑つた。

昼からは、旭川を左に見ながらの強行軍だった。いつものように舗装された道路を歩いていけば楽なんだけど、起伏も多く、土道に慣れてないせいとか、少しずつ足が遅くなつてきた。さくらは、さつきから富蔵さんに背負われて眠っている。

このまま進めば、たぶんダムのある鶴田に行くはずだ。温人が「もう何時かな」とケイタイを手にするのを見たので思い切つて、昨日、自分の中に沸いた決意を伝えた。

「温人、もうケイタイを見るのはやめよう。俺たちどうなるかわからないけど、今はここで生きていくしかないんだ」

僕目をちよつとの間、見つめたあと、温人もしっかりとうなずいて、

「そうだな、あるとついつい、つながっていないかと気になるし、見ると、かえってさくらちやんを悲しませるもんな。よし、帰る日まで電源をオフにしよう」

旭川に注ぐ鶴田の滝谷川の板橋を渡り、そのまま滝谷川に沿って山間へと分け入った。道はしだいに狭くなり、傾斜もきつくなっていった。

あたりもほんのり薄暗くなりかけた頃、「たぶん、この辺が角石村だと思うんじゃが……」紙に書かれた地図を手に、富蔵さんが首をかしげて立ち止まった。

ちようど前方の切り立った山裾に、小ぢんまりした藁ぶき家があり、鋏をふるっている年寄りの人が見えたので、行って聞くことにした。

その姿を最初に目の当たりにしたときの驚き、それはたぶん一生忘れない。

まっ白くなって地面にくっつきそうな髪と髭。柳のように細い身体に柔道着のような分厚い服と袴。それを荒縄でしばっている。「なにか、お尋ねかの？」と振り向いた眼の、矢を射るような鋭さ。鍬を抱える腕はそれを支えにしているのではなく、すぐにでも振りかざせるといふ気配。歳は百歳をゆうに超えているとしか思えない。

「富蔵さんから渡たされた日船上人からの手紙を読み終えると、老人はギロツと僕らを見て、それから、「おもしろいものよのう、生きておると。さつ、入りなさい」と言った。

家は外からは小さく見えたけど、中に入ると天井が高く案外広かった。土間には藁や、むしろ、薪といったものが積まれ、大きな水がめ、桶、鉄鍋なども置いてあった。部屋には上がると囲炉裏があり、奥はガランとして何もない板の間だった。ただ正面に神棚があり、壁には長い棒や木刀が何本も掛けてあった。どれも黒々と磨かれていた。

「ここを使いなさい」

そう言うと、老人は何事もなかったかのようにならぬ外に出て行き、また鍬の音をさせ始めた。富蔵さんも僕らも、取りあえず居させてもらえそうなので安心して互いの顔を見合った。

その日は疲れて、夕食を取る元気もなくそのまま寝てしまった。

翌朝、いい匂いで目が覚めた。富蔵さんが土間の方から「ご飯ができてますよ」と呼んでくれた。さくらも起きていて、タスキをして配膳を手伝っていた。老人の姿はなかった。

朝食をすませると、僕と温人は昨日から気になっていた、壁に掛けてある木刀に見入った。たぶん二人共、今頃、岡山の道場で剣道の練習をしている光景が思い浮かんでいたんだろう。そんな僕らに気付いたのか、いつの間にか老人が前へすすつと来て、その一本を取ると「振ってみるか」と僕に渡した。恐る恐るそれを手にした僕は、いつものように正面に向かって一礼すると、「エイッ」と一振りした。

「ふむ、少しは筋があるようじゃの。では、わしに打ち込んでみい」

老人は、壁にかけてあった短い棒をつかむと「さあ、どこからでもいい」と左手で棒を構えた。



えっと、僕はちゅうちよしたけど、上段から思い切って打ちおろした。カシッと受け止められる音がして気がつくのと、僕の木刀は床に吸い込まれるように手から落とされていた。二度やってみただけど同じだった。

次に温人に代わった。その時は、老人は棒も持たず素手のままだった。

「やっー」と打ち込んだ木刀は次の瞬間、ピタツと老人の両手に挟まったまま、温人が歯を食いしばって抜こうとしてもビクともしない。そのうち、ぐいっと引かれ、温人は前のめりに倒されてしまった。

「ははは、少々手荒かったかのう、どうじゃ、習うてみるか？」

そう聞かれ、僕は迷うことなく「はいっ」と答えた。

「但しじゃ、条件があるぞ。上人の文には、お前たちは海を渡った国々のことや、これから先々の史実に長けておるそう。どうじゃ、わしにそれを講じてくれぬか」

こうして僕らと不思議な老剣士との、教え教わる日々がはじまった。



温人によれば「もしその人だとすれば歳は百六十歳。仮に二代目の久勝だとしたら歳は近いけど、京都にいて門下生が何千人もいるはず」

僕らの言ってるのは、今も建部町角石谷に道場のある竹内流古武道の創始者、竹内久盛のこと。久盛は一五〇〇年代にこの場所に城を築いて戦った武将だった。でも負けてからは農民となり、以後、敵を倒す武芸から人の心身を鍛える武芸へと新しい道を切り開いていった。

「そうでないとしたら、久盛に秘伝を授けたといわれている、愛宕神の化身かもしれないね」  
実際、近所のお百姓に尋ねても「武術の老先生」と言うだけで、だれも名前までは知らないよ  
うだ。直接、先生に聞いてみたこともあるけど、その時は

「ハハハ、わしがどこのだれであろうと、もはや何の意味もなからう。しよせん、わしは終わった人間。それよりお前たちは若い、ゆえに年老いた者にわずらわされるより、今はおのれの中のまことを見つげることのみに励むことじゃ。それに、わしが知り得たことは史実を講じてもらう折にでも話すことがあるう」

僕らの一日は朝は暗いうちに起き、たぶん午前四時頃だと思いうけど、支度を整えて畑に出かけ、三時間ほど耕して一度戻り、お茶漬けとかを食べてまた畑へ。そうして昼前には戻ってくる。剣術と捕手という武術の手ほどきを受ける。

午後は遠くの田んぼまで行くこともあれば、薪を集めに山に入ることもある。雨の日は教わったことをくり返し、練習を重ねる。夕飯を終えてから歴史の問答に入る。先生が質問をされて、それに二人が答えるかたちだけど、たいがいは温人が話す。長くても一時間くらい。僕も温人も朝が早くてすぐ眠くなるから。

さくらと富蔵さんも互いに教わることがあって毎日忙しい。火のおこし方、かまどでご飯を炊く方法、裁縫のしかたや洗い物のやり方。そのたびに富蔵さんはうれしそうに、「さくらちゃん、それはね、こうするんだよ」と教えてくれている。

富蔵さんも「わしの名前の字はどう書くんだい」とか、「五に六をくわえると・・・いくつだっけ」と、さくら相手に勉強をしている。

時折、近所のお百姓が味噌や豆、芋といったものを持って武術を習いに来る。そのときは庭にむしろを敷いてやる。中には本物の武士がやって来て、一手、お手合わせ願いたいということもあるが、たいていは野良に忙しいので断っている。

それでも、どうしてもという侍もいて、その折には面倒くさそうに土間から鍋蓋を持ってきて、「では、これで受けましょう」と言った。相手は馬鹿にされたと思ひ、むきになって木刀を振り下ろすのだけど、見事、木刀は鍋蓋に貼り付いたまま地面に押さえつけられていた。

日が過ぎるにつれ、僕らもこの時代の生活に慣れてきた。来た頃はシューズを履いていたけど、それが、わらじの方が土道を歩きやすいとわかってからは、自分のわらじを富蔵さんに教わりながら、夜、寝る前に編むのが習慣になった。

「二足のわらじと言うて、半日ですり切れて帰りに困らぬよう、もう一足持つておくんだよ」

十月に入ると朝晩が冷え込んできた。これは昔も今も変わらない。夜、板の間にむしろを敷いて綿入れ一枚掛けるだけでは、寒くて眠れなくなった。囲炉裏の火が無いといっそうきびしい。まだ冬は来てないのに、今からこれじゃあどうしたらいいんだろう。さくらは温人も、夜は持っているだけの服を全部着こんで寝ている。粗末な別棟で火も無しに寝ている先生を思うと、わがままは言えない。

そんな僕らのことを察したのか、ある日、富蔵さんが僕らの履かなくなったシューズを手にして、「これはもう御用はござりませんか、もしそうでしたら頂戴できませんか」と言っていてどこやらへ持って行った。

帰って来た時は、背中に山のように布団を背負っていた。

「分限者の家であるの履物を見せましたところ、たいそう珍しがられまして、これなら数年は長持ちするだろうと、綿入れ三枚、着物や足袋と換えてもらえました」

これで僕らの冬支度の心配はなくなった。

ある日、近所の母親が、息子が怪我をしたので診てもらえないかと言ってきた。その日は先生も僕らも畑に出ているなかったので、さくらが対応した。

子どもの足首を見ると何かでざっくりと切られたようで、そこに血止めに泥がぬりこまれていた。さくらはすぐに富蔵さんに新しい水を汲んできてもらい、まず傷口をきれいにし、それからキズパワーパッドを貼り付けて帰したそうだ。

しばらくして、その父親が山の芋を持って、おかげさまで良くなりましたと礼にやって来た。

そうしたら、そのことがいつの間にか知れ渡ったらしく、連日、「わしも」「うちの子も」と怪我人がさくらに診てもらいに来るようになった。

一年前、さくらは下校中に友達同士で追いかけてっこをしていて、誤って土手を滑り落ち、手と足にひどいスリ傷をおった。その時は、お母さんが慌てて、すぐに消毒液で拭こうとしたのだけど、おばあちゃんが、そうじゃなくて水で洗って、傷パッドを張るのが今は正しいやり方だよと教えてくれた。そのことがあつてから、さくらは怪我の手当てや風邪や腹痛など、よくある病気の治し方を熱心におばあちゃんに聞くようになった。それが、今になって役立ち始めた。

先生もそんなさくらに、以前から道場で使っている塗り薬や薬草を渡され、処方の仕方も書き留めておくよう言われた。こうなったら、さくらも動じるどころか嬉しくてしょうがない。打ちみやねんざ、頭痛、何でも効くタイガーバームも大活躍だ。

「ねえ、富蔵さん、もつと薬がほしいから、温ちゃんが中田新町には近藤医院という名医がいるはずだから、そこで買うといいって教えてくれたけど、今度、連れて行って」と、すっかりナイチンゲールにでもなったようにたくましい。





史実問答で最初に先生から発せられた質問は、

「この江戸幕府、いつまで続くか」だった。温人の答えに、

「なんと、それほどまでに長く・・・」と、しばらくは天井を見つめて黙り込んだ。  
次に、「その間、徳川をしのご武将はおらなんだということか」

その通りです。先生は又も黙った。

それから「なら、この先二百年、いくさは起きんのか」

はい、天下太平と呼ばれる時代が続きます。

「ふーむ、そうか、わかった」それから先生は巻き紙を手にして、筆で何やら長いこと書きつけていた。そして、書き終えると「よし、今宵はここまでにしよう」と言って、すくつと立ち上がり外の自室に向かわれた。

次の夜は「して、その幕府を倒したのは、どこの武将じゃ」から尋ねられた。

薩摩と長州です。

「なるほど、それは理になつておる、目の届かない遠くの大名が力を蓄えておったか」

はい、そうです。その前に外国船がやってきました。

この、ペリー来航からの話は先生も想像できなかったようで、「なんと、異国に脅かされてな、それも、たった四艘の船にな」と長い眉をくつつけるようにして考え込まれた。

温人がていねいに、その頃、異国によって世界中の領土、唐、天竺までもが制圧され、日本にも迫ってきたこと。異国の武器は強力で、船は帆を使わず蒸気で自在に動き、しかもいくつもの大砲を備えていることなどを説明した。

「そうか、この国がこれから二〇〇年眠る間に、どんどん異国は強くなっていくわけだ」  
そのために日本では、新しく京の帝を立てて異国に立ち向かおうという人と、幕府と帝、両方で力を合わせ異国との話し合いに臨むべき、という人に意見が分かれ争うことになりました。

「ふーむ・・・」

温人の話は、いつもわかりやすい。きつとそれ以上の知識を持っているからだと思う。自分では小学館の「漫画日本の歴史」を読んだだけだよと言っているけど。

月も半ばに入り、温人とさくらはかねてから一度訪れたいと言っていた、中田新町に行くことになった。この日は丁度、七社八幡のお祭りがあるので、それを見物してから寄ればいいと、すっかり一緒に行くつもりで富蔵さんのすすめで計画が決まった。

中田新町は江戸時代、備前岡山藩が防備のための陣屋を置いた所で、武士だけでなくその生活を支えるための大工や八百屋といった町人も住んで、大変にぎやかだったそうだ。でも明治になって、御茶屋と呼ばれる本陣や武家屋敷がすべて取り壊され、町屋が少し残されただけになった。そのうちの一軒、お医者さんだったという近藤さんのお家を小学校の社会科見学で見せてもらったことがある。

入口を入ったところに診療に行くとき乗っていたお籠が置いてあって、温人は、すごいなあ、映画で見ると同じだと興奮していた。それが今日、実際に出会えるかもしれないとあって、温人は早くから出かける準備を終え、さくらたちが行かうかまどの火入れや、水汲みを代わってやっていた。

陽が昇り始める前に、鶴田の高瀬舟が出入りする旭川の舟着場まで四人で向かった。そこから舟で直接、福渡まで行けば早い。舟頭さんに先生の書付を見せれば、黙って乗せてくれるはずだ。このあたりだけでなく、美作藩、備前藩、それよりもっと先まで先生を知る人がいて、僕らがそこに厄介になつてしていると伝えれば、手を貸す者もいるだろうと言われた。僕はその後、別れて町に行き、先生から言付かつた手紙を届ける役目がある。

来た時と同じ道を今度は下つた。二尺道と呼ばれる狭い道は人がすれ違うのがやつとで、一度、荷物を背負つて登つてくる牛と鉢合わせをして、皆であわてて山の斜面によじ登つた。

下へは一時間ほどで到着した。前は上りだつたせいか、ずいぶん遠くに感じたけど鶴田までは意外に近いことが分かつた。

久しぶりに間近に見る旭川。僕らの時代とは圧倒的に水量が違い、ゆつたりと、海のように深い。その上を材木を載せたいかだや、俵を積んだ舟が行きかう。今の旭川では、岩や洲があちこちに顔を出していて、舟はおろかカヌーでも操るのは難しいだろう。川のおい、水の色、どれも透明で生き生きとしている。プランクトンの死骸で白い泡を吹く、僕らの旭川って何なのだろう。

さくらたちの乗る高瀬舟は津山から瓦や炭、竹籠を乗せ昨晚から川岸に係留していた。中学校の廊下の掲示板に昔の建部の様子で、高瀬舟で結婚式を挙げている写真が貼ってあった。それと実際は、さほど変わりないようだけどこれには帆柱が建っている。

河原で舟曳人夫さんが何人もふんどし姿でたき火にあたっていた。中にはフリチンの人もいて、富蔵さんが「さくらちゃん、見ちゃあいけませんよ」と手で目かくしをしてやったけど、さくらの方は「大丈夫だよ、湯原温泉でよく見てるもん」と気にもかけていない。

この日のために、さくら達は少しお金が必要になった。それが富蔵さんの機転で思わぬ物から手に入れることができた。

僕の荷物を入れていたスーパー「マルナカ」のビニール袋。これが、水を入れてもこぼれない渡来品の袋として高い値段で買い取られたそう。僕らが、道や川に捨てられたゴミとしか見えないものが、この時代では折りたたんで持ち歩ける貴重な水入れに変わった。



三人を見送った後、僕は先生から教わった家を訪ねて鶴田の町に入った。町と言っても、舟の荷を納めた土蔵がある他は、軒先に草鞋や蓑やらがぶら下がった店とも言えない何軒かと、「はたご」と書いた看板の掛かる家が一、二軒ある程度だ。

これなら、今の福渡の町はきつと大都会に見えるだろうなと何だかうれしくなった。

後ろに小高くそびえているのが鶴田城のあった城山だ。かつて僕らの先生が、宇喜多勢とこの城や上流にある一之瀬城で戦を繰り広げたのだ。

訪ねる家はすぐに見つかった。町を抜けて少し行くと竹やぶが続き、その先に藁ぶき家が数軒あった。そのうちの一軒が糟谷助右衛門という人の家だった。温人によると、その人の名前は旧建部町時代に編纂された「竹内流」という本の中にあつたそうだ。何でも一之瀬城が落城した後にも竹内親子を支援していた人らしい。

僕は、出てこられた腰を曲げて杖をついた小柄な老人に、自分は角石谷の道場に厄介になる身で、先生の手紙を持参したことを伝えた。

助右衛門さんは「それはそれは、わざわざのお越し、恐縮でござる。して、大将はお達者でいられるか・・・そうですか、それはなによりです。せっかく来られたので、茶の一杯でも召し上

がつていただきたいが、なにぶんにもこの年寄り、身の回りのすべてを通いの者に頼っておるあり様。お許し下され」

それから老人は杖を置いてそばにあった切り株に座り、とつとつと話をしてくださった。

「いやあ、激しい戦じゃった。敵の宇喜多勢が4千騎、我が方は1千騎、郷内の動ける男はすべて馳せ参じた。城をぐるりと囲まれても、そのたびに追い返し、なんとか持ちこたえておったのじゃが、いよいよ矢も食い物も底をつき、鶴田の城を後にした。

残るは一之瀬城のみ。ここを決戦場と定め、後には引けぬと皆が総出で戦った。

出丸めがけて攻め登る敵に岩石を落としては、しりぞかせ、まわりの山中では潜んだ兵が接近戦で相手に切りつけ、ことごとく敗退させた。山の中は長い槍や刀は役に立たぬで、わしどもは小刀と体術に長けておったから。

ところが敵もさるもの。このまま近づくんでは城に火を放つこともできん、そこで、葛で作った網に石を入れて、それを反らせた二本の立木にくくり、雨やあられと飛ばし始めた。これには参った。兵が城中に避けるすきに火の矢が放たれてしもうた。あの落城以来、大將はきつぱりと武士とは縁を切られた。つくづく厭になられたのです。野に入り、土を耕し種をまく、百姓にな



られた。そうして、ひたすら人の心を鍛えるための武術、その開眼に精進して来られた。ご身内にも、けっして武士になるなど言われ、仕官の口がいくつもあつたのに、かたくなに受けられなかった。

あれから徳川の世になり幾十年、今となれば、それが正しかったとわかり申す。もはや武士に如何ほどの役目がございましょうか。むしろ、この平穩な時なればこそ己に成すべきことがあると、あの方はお考えになられたのでしょうか。いつになろうとも尽きることのない人と人との争い、これをわずかでも無くしたいと。

ましてや、人の心というものは、どうにもままならぬもの。普段は仲が良うても、何かの拍子で疑心が生まれ、するとそれが憎しみに変わり、やがてはいがみ合う。それが、これまでの人の世の常、そのことを、あの方はよくご存じなのです。すべては人の心の未熟さ、至らなさから起るのだと。そのために武をもつて心根を強くする。皆の心が、善をもつて動じねば、諍いもなくなる。ましてや殺しあうこともない。武士も百姓も身分の分け隔てなく、あのお方が教授されておるのは、そのような思いからだと思存じます。偉いお人です・・・」

鶴田の町を出たのは、まだ朝の光が感じられる時刻だった。僕は前から、旭川ダムに沈んだこのあたりの昔の地形を見ておきたいと思っていた。秋に行われる中学校の文化祭「飛翔祭」で、温人やクラスの間と「旭川ダムに水没した自然」と題して等高線の模型を発表をする予定だったけど、資料が少なくうまく再現できなかったから。

僕は再び滝谷川に出て板橋を渡り、旭川に入り込む河口へと進んだ。そこに第二ダムにより水中に姿を消した伝説の湖、「姫こ淵」がある。

河口の手前まで行くと、左方向に大きな楓の木が立つこんもりした林が見えた。近づくと、木々の向こうに、川に沿って長く碧々とした水面が広がっているのが分かった。「ここだ！」

気がつくとき空の様子がわからなくなっていた。あたりが夕暮れのように暗くなり、間もなくゴロゴロと鳴って大粒の雨が叩きつけてきた。僕は楓の大樹の下に入り、しばらくここでしのぐことにした。と、湖に沿った道を二人の女性が雨に追われ駆けている。僕は、包みに入れ

ていた百均のレインコートを取り、走り出した。前を行く薄桃色の衣装を身につけた若い女性が、僕に気づいて立ち止まり、僕がひろげたレインコートを受け取った。それを頭上にかぶると、不思議そうに空を透かして見て、

「あつ、水の玉・・・」と言った。その瞬間、僕の中に何かが焼き付いた。

きれいな人だなと思った。

僕は急いで木の下に戻り、あとをレインコートに身を寄せた二人が小走りについて来た。

大樹の傘に入りホツとする間も、薄桃色の着物の女性は透明なレインコートを空に掲げては、いつまでも眺めていた。その様子は、女性と呼ぶより女の子のほうが近かった。

もう一人の後から来た少し年配で藍色の着物の女性が、胸元から手拭いを出し、そんな女の子の後ろに垂れた髪を拭いてやった。おそらく、僕と歳があまり変わらないように見える女の子は、身分が高い人なのだろう。年配の人はお付きの女中さんなのかなと思う。ただ、この時は突然なこと話すこともなく、雨雲が通り過ぎるのを待つだけで終わった。

雨は三十分ほどで止み、空も明るくなり田んぼに雀たちも飛び交い始めた。僕は荷物を手にすると、ヒョコっとお辞儀をして楓の木を出た。「あの、これ」という声がすぐにして、振り向く

と女の子がレインコートを前に差し出し、こちらを向いて笑っている。僕も笑い返して、差し上げますと言ってその場を離れた。

僕はダムで沈んだ地形を頭に描きながら、少し時間をかけて周辺を回ることにした。それには、さっきの事が頭に残っていて、帰るまでにはスッキリしたいという思いもあった。

こんなこと初めてだったから……。

角石村に着いた時は陽が西の空に傾きかけていた。

僕は先生にはあらかじめ調べたいことがあるので、寄り道をして来ますと言って出かけたけど、あまり心配をお掛けしても悪いので足早に家へと向かった。

帰宅してみると来客のようで、新しい草履が二足、土間に並べてあった。

小さく「ただいま帰りました」と声を掛けた。と同時に、板の間から富蔵さんが青い顔で飛び出して来て言った。

「鮎太さん、大変です。さくらちゃんが侍の子に連れていかれました」



この物語に登場する人物やその出来事は、あくまで想像上のもので実際の人物、史実とは異なります。

## 「たけべアメージングストーリー」第2話

発行 2015年10月10日

建河出版社 岡山市北区建部町福渡 242-2

TEL086-722-1181

Eメール [haiji@doremi-familia.com](mailto:haiji@doremi-familia.com)

印刷 ドレミファミリア アートギャラリー